

チェルノブイリ通信

チェルノブイリ支援運動・九州

事務局：北九州市小倉南区徳吉東1丁目13-24

☎/FAX 093-452-0665 深江 守

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■
■ No. 3 ■
■ 1990年12月22日 新 ■
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

750kgの支援物資を
ジトミールに送りました

久しぶりの通信です。9月の初めに出してからですから、ほぼ3ヵ月ぶりの通信ということになります。本来なら、11月の初めには出す計画で原稿の方も半分くらい用意しておいたのですが、ヴィースニック新聞社との通信が計画どおりに進まず、時期を逃してしまいました。そうこうしているうちに支援物資を現地まで届けることがいかに難しいかが分かってきて、実際に送ることがはっきりしてから通信を出そうという事になったわけです。途中経過も分からずいざいざとやきもきされたことと思いますが、お許しください。支援物資は無事届けることができました。

■ 260万円を越えた支援募金

10月末までに何とか200万円の

支援募金を集めようと呼び掛けていましたが、みごと11月初めには200万円の大会に達し、現在260万円を少し越えました。8月末までに寄せられた募金は20万円そこそこで、募金の目標額を決めるときには『100万円をこえるといいね』という話をしていたのですが、こんなにたくさん集まるとは正直思ってもいませんでした。たくさんの募金有難うございました。

今回寄せられた募金で以下のものを購入しました。

◆ ◆
①、放射能測定器5台。製品はアロカ製のTGS-121というGMサーベイメータで、ベータ線まで測定することができるものです。ジトミールには現在（市民レベルで使えるものは）4台の放射能測定器しかありません。その内の3台は中部のメンバーが持っていたもので、うち2台は日本で言うところの「R-DAN」タイプのもです。その4台がいまフル回転している訳ですから、私たちが送る5台の放射能測定器は大いに役立つものと思

ます。ちなみに1台24万円なんです
が『予算が100万円しかないんで2
0万にまけてもらおうと5台送れるん
ですが』と話したところ、『分かりまし
た。私たちも協力したいので』とあっ
さり20万円にしてくれました。もう
少し値切れれば良かったかなとも思いま
したが、まあ妥当な床でしょう。

②、1kg缶粉ミルクを400缶と50
0入りスキムミルクを400箱。粉
ミルクに関してはいろいろ手を尽くし
て、かなり安く手に入れました。また、
業者から哺乳ピンを50本、朝食シリ
アルを500食分提供してもらって
います。

③、絵本を100冊。

以上の物資を購入しました。

◆ ◆
これらの物資を送ろうと思っていた
のですが、「チェルノブイリの子供た
ちにクリスマスプレゼントを！」と各
方面で呼び掛けていたところ、ソク
クとクリスマスプレゼントが送られ
てきました。12月に入ってから、毎
日のように段ボールの箱が送られて
くるようになりました。箱の中には子供
たちのやさしい思いがいっぱい詰ま
っています。

初めのうちは「おっ、今日も来たか
とワクワクしながら中身を見ていたの
ですが、それも時が立つにつれて対応
しきれなくなり、そのまま山と積み上
げられたままになっていました。喜ん
だのは我が家の4つと7つになる娘た
ちです。「これもらっていいん」と送
られてきたおもちゃ類を整理するの
に大喜び。これらのプレゼントを見た
ときのチェルノブイリの子供たちの笑顔

が目に浮かぶようでした。

送られてきたものは、子供たちが大
切にしているものばかり。一つ一つき
れいに袋に入れてあるもの、「早く元
気になってください」等々の手紙が添
えてあるもの、折り鶴や絵本など様々
なものです。その一つ一つにチェルノ
ブイリの被害にあった子供たちを思う
気持ちがいっぱいに込められていま
した。問題はこれらの物資が無事に届
くかどうかです。

■電話がつながらない

今回私達が支援物資を送る相手はジ
トミール・ジャーナリスト連盟、「ジ
トミールスキー・ヴィースニック」新
聞社です。ヴィースニックとのやり取
りは中部のメンバーが持ち込んだF A
Xを使って行ないます。お互いに日本
語、ロシア語が分かりませんので、英
語が共通語ということになります。と
いても私が英語を話せる訳ではなく、
何人かの人に翻訳をお願いしています。
こうした条件は相手も同じようで、ヴ
ィースニックに英語の話せる記者は一
人だけで、その人が居なければ送られ
てきたF A Xもしばらくそのままにな
っているということです。

なによりも問題なのは電話が思うよ
うにつながらない事です。ソ連の電話
回線が圧倒的に不足しているために、
モスクワまでの回線に割り込むのに一
苦勞です。割り込むためには3時間、
4時間とひたすら待つしかありません。
それでもダメなときは翌日再び挑戦と
いうことになります。初めてF A Xを
送ったときは3日目ようやくつなが
りました。初めての経験だったのでつ

ながった時の喜びは何とも言えないものがありました。最近は慣れてきたので、2～3時間でつながった時は「オッ、今回はラッキーだったな」という感じですが、FAXを送るのに不安を感じていたのは相手も同じだったようです。正確にはヴィースニックの方がイライラしていたようで、何回送ってもダメだったそうです。つまり、いつも話し中だったわけです。そういえば我が家の電話はいつも話し中なのです。今後のことを考えれば、FAX受信だけでももう一ヶ所連絡先をつくらなければ。

こうした問題が重なり、11月末には支援物資を送るという計画大幅に遅れてしまいました。

■物だけを送ることの難しさ

募金が目標に近付いてきたので、外務省や在日ソ連大使館と連絡を取りました。こちらの希望は、①、支援物資をモスクワまでタダで運んでもらうこと。②、運んだ物資を日本大使館で一時保管してもらい、後日ヴィースニックに引き渡してもらう、ことです。

①については、アエロフロート機で運んでもらえるようになりました。問題は②です。そもそも大使館には一時保管できるようなスペースはないとのことでしたが、一旦大使館に持ち込んだものを再び引き渡すことは手続き上かなり複雑になり、無理が生じることでした。となると、ソ連大使館の方でウクライナのキエフ空港まで運んでもらうか、ヴィースニックの方でモスクワ空港まで取りにきてもらうしかありません。キエフまで運ぶことにつ

いては大使館の方では責任は持てないということでした。つまり、キエフまで運ぶには一旦荷物を積み換えなければいけないのですが、ソ連の国内線空港は少し離れた所にあり、その移動に責任が持てないということです。なるほど、モスクワ空港に支援物資が山積みされているという「噂話」がなんとなく分かりました。

そこで、ヴィースニックにFAXを入れました。「モスクワまで取りにくれますか？」と。

その返事が待てど暮らせど来なかった訳です。その理由は二つあります。一つは我が家の電話がほとんどふさがっていたこと。もう一つ、これが問題です。いわゆる運ぶ手立てが簡単には見つからないということです。日本だったらそれこそ、トラックをチャーターするなり、運送会社にたのむなりすればすみませんが、ソ連社会でそうしたことがすぐ出来るでしょうか。返事がくるのを待ちながら、「ウーン、トラックの手配に手間取ってるんだろーな」と物だけを送ることの難しさをあらためて感じました。これで失敗したら日本の支援運動全体に与える影響があまりにも大きい過ぎます。

そこで道連れを頼むことにしました。「救援・中部」が、クリスマスに合わせてクリスマスカードや米、スキムミルクなどを送る計画を進めていたので、どうせなら一緒に送ろうということになりました。送る日時は12月25日か26日。成功するも失敗するも道連れがいるということは、半分ほど肩の荷がおりた気分になります。

それでもまだ連絡は取れません。

■12月24日、新潟発ハバロフスク

經由モスクワ行き。

12月17日(月)、突然日時が決まりました。最初の計画では、成田発のモスクワ直航便の予定だったのですが、「成田は年末の混雑が激しくとても2トもの物資を運ぶ余裕はない」とのことで、急遽12月24日の新潟発ということになりました。(この段階でもまだヴィースニックからの返事はきていません)

24日の便に間に合わせるには21日の午後3時までに通関手続きを済ませなければなりません。さあ、大変です。成田だと通関手続きも外務省一任で済んだのですが、新潟だと自分たちでしなければいけません。しかも、与えられた時間は1日しかありません。なにをどうすればいいのか。この仕事を任されたのは、たまたま仕事が休みという反町さんです。朝早くから東京、名古屋、福岡と一日中電話の応対です。まさにこの一日で、いろんな事を勉強しました。

その一つ。地方地方の税関によって認識が違うことです。どういう事かというと、支援物資の受け入れ窓口であるヴィースニックを「正式な援助物資の受入先」と認めるかどうかという点です。その条件を充たすのは相手が公の機関であるかどうかということらしいのです。東京税関によれば「ソ連社会ではそもそも私的機関というのは存在自体が難しい。しかも新聞社となればなおさら公共性をもっている」と、柔軟に解釈してくれたのですが、福岡

通産局では「公の機関とは認められない」。故に、援助物資ではなく「輸出品」として扱います、となったわけです。また、福岡通産局では放射能測定器を扱った事がないのか、「ココム製品である」と言う始末。外務省や製作元のアロカでは「そんなことはない」と言っているのに。結局、手続きの際に取り扱い説明書を提出することによってなんとか納まった次第です。

その2。「輸出品扱い」となったため、おもちゃ類が送れなくなってしまいました。輸出品となると「品質検査法」というのでチェックしなければならないそうで、輸出品目として「おもちゃ」という範疇ではくくれずに、その製品が「どういう素材で出来ているか」、その材質が問題となり検査する場所が変わってくるらしいのです。時間があればもう少し詳しく調べて、材質ごとに仕分して検査に出すことも出来たのですが、今回は諦めました。唯一の救いは、「ぬいぐるみ」は「縫製」の範疇で一括できるため、送ることが出来ました。

これらのことを一日で調べ上げ、運送会社を手配し、まさにギリギリの線に間に合わせる事が出来ました。

まだあります。そうです。荷造りが終わっていません。17、18の二日間、不眠不休の闘いです。全部で93箱の段ボールになりました。その一つ一つに行き先を書いた紙を貼り、「素材」ごとにナンバーを打ち、合間をぬってヴィースニックとアエロフロートに物資の最終的なリストをFAXで入れ、通関手続きに必要な書類を作成し、何か見落とししたところはないか確認す

る余裕はありません。ただ、無事に届くことを願うのみです。

そうそう、「ヴィースニックが25日にモスクワまでトラックで取りに来る」という連絡が入ったのは18日の夜でした。今から思えば、まさに綱渡りの作業だった訳です。

しかしどうやら25日には支援物資はジトミールに到着します。日本の友人からのクリスマスプレゼントとして。

■今後の課題

そういう訳で、送れなかったおもちゃ類が段ボールに5箱ほど残っています。また、遅れて到着した荷物が今のところ3箱、もう少し届きそうな気配です。これらの物資を第二便として送らなければなりません。時期的には、1月末か2月頃ということになりそうですが、そのためにも、二つの問題をクリアしなければいけません。一つは、「援助物資」として認めさせること。二つには、「輸出品」として送るときの手続きの問題です。頭の硬いお役所仕事を変えていくことも支援運動の一つの運動になりそうです。

次に、医療援助の問題です。何といっても医療援助が最も緊急性を要します。今回、いくつかの地域で医薬品や医療器具について当たってもらいましたが、いずれもおいそれと手に入るような代物ではないとのこと。同時に、日本で使っている器具がソ連でそのまま使用できるのか、という指摘もありました。こうした問題は、やはり医者が直接現地に入って病院を訪ね、その現場を見た上で答を出してもらうしかないと思っています。そういう意味か

らも、なんとしても医療団派遣は実現させたい課題です。協力してくれそうな医師を探しています。心当たりのある人は、ぜひ説得してみてください。

また、「支援運動・九州」ということで一つにまとまってはいますが、地域によって取り組みにかなりの差が見られます。その原因の一つには、支援運動そのものが中々見えてこない、実感として伝わってこないという点にあるのではと思います。そこで次回は、九州各県からそれぞれ代表を派遣するという形で、直接自分たちが現地の人たちとの交流し、その目で被害の実態を確かめ、いま何ができるのかを確認する必要があると思っています。もちろん、医療団派遣も合わせて。

ウクライナ、白ロシアの二班に分かれての訪問を考えています。

まだまだ始まったばかりの支援運動ですが、息切れしないよう頑張りましょう。

また、第一次支援物資の全リストと会計報告については、次号で行ないます。(深江)



ジトミールの皆さんへ！ 九州の友人より

ジトミールの皆さん、こんにちは。

私たちは日本列島の南の島・九州でチェルノブイリ支援運動をしているグループです。私たちのことを少し紹介させていただきます。

私たちは政府とか政党とか、その他の大きな団体などには関係なく、一人の市民として行動する者たちのゆるやかな集まりですが、原子力発電に反対するという点で一致しています。残念ながら、いま日本には四〇機近くの原子力発電が動いていて、この九州の中にも四機あります。

一九八六年四月二六日のチェルノブイリの大事故は、私たちにとって大変なショックでした。一番恐れていたことが現実になってしまったという恐怖でした。一日も早く日本の原発を止めさせなければと、私たちはいつそう決意を固めました。

それと同時に、ソ連の現地はどんなに大変な事態だろうかと、心を痛めずにはいられませんでしたが、ただ、国境の壁、政治の壁にさえぎられて、私たちにはその後の現地の状況が伝えられませんでした。皆さんはきっと、世界中から忘れられたような孤独と絶望感に苦しまれたことでしょう。

ソ連政府のペレストロイカ、グラスノスチ政策によって、皆さんの状況が私たちに伝わり始めたのは、やっと今年（一九九〇年）の春からでした。私たちが想像していた以上の被害の甚大さに、またしても衝撃を受けました。とりわけたくさんの子供たちが苦しんでいると知って、いたたまれない思いです。

いったい、九州の私たちに何ができるかという問いかけの中から、とくに皆さんの役に立ちそうなもの（放射能測定器、粉ミルクなど）、あるいは子供たちの励ましになるようなもの（絵本、折鶴など）を送ろうということになりました。

最初に紹介しましたように、私たちは大きな組織ではなく、自発的な市民の集まりですから、一人一人が自身のささやかなお金や物を持ち寄ることしかできないのです。ですから、クリスマスに間に合わせようとした第一回の贈り物も、このくらいにしかありませんでしたが、ここにはいっぱい心がこめられていることだけは知っていただきたいと思います。

遠い九州からですが、私たちはあなた方の苦しみを見つめています。あなた方のことを、世界は忘れてなどいないのです。

どうか、くじけずにがんばって下さい。原発のない世界を願いつつ。

「チェルノブイリ支援運動・九州」

事務局 深江 守

Dear People of Zhitomir

Hello from Kyushu, one of the Japan Islands in the South.

We are members of a supporting group for Chernobyl. I would like to introduce ourselves briefly first of all.

We are in a moderate group of citizens, free from any governmental and political parties or any other major organizations in Japan. Though each of us may have own ethics for activities, we are all united to stand against atomic power generation. We are very sorry to say, however, there are almost 40 atomic power plants in our country and 4 of them are generating in Kyushu island.

The Catastrophe in Chernobyl on 26th of April 1986, really gave us a great shock. It was a horror: we had feared the most that it might happen someday and actually took place at last. We made our resolution even stronger in order to stop the atomic generation in Japan as soon as possible.

What came to our mind grievously at the same time was how disastrous the spot and the people must have been. But we were not informed about the followed situation due to the wall of the national border and the politics. We suppose you must have suffered for the deepest despair, you might have felt that you were left in hopeless isolation from the whole world.

It was in only this spring (in 1990) that we began to learn your situation little by little, thanks to Perestroika and Glasnost of the Soviet Government. And the damage we know was far greater and more serious than we expected. We are especially sorry for such a big number of children in suffering.

We discussed among ourselves what we could do for you and the children, and decided to send some helpful and useful things for you, such as radio-active rays monitoring machines and powdered milk. We are also sending those things to encourage the children, like picture books and paper cranes with which we wish them good luck and the world's peace in a Japanese custom.

As I mentioned that our group is voluntary and not big at the beginning of this letter, all we can do is to collect small amount of money or goods. Our first gift, which happens to be for Christmas time, is therefore small but packed with full of hearty wishes and prayers.

We have been watching at you and trying to do something for your sufferings. We will keep in touch. The world never forgets you.

We hope you will never give up, never be shaken. A Merry Christmas and a happy new year. With the wish for the world without atomic plants.

MAMORU Fukae

イーゴリ・コスティン写真展 実行委員会設立の呼びかけ

◆ チェルノブイリの悲劇を 繰り返さないために

チェルノブイリ原発事故からまもなく五年が経過しようとしています。ノーポスチ通信社の特約カメラマンのイーゴリ・コスティン氏は、事故直後にヘリコプターで事故炉上空から現場を撮影し、それ以来今日まで、事故処理のすべての段階を、そして避難民たちの苦悩、さらにすべての命あるものに押し寄せた悲劇を、克明に撮影してきました。その結果、彼は大量の放射線を浴びて健康を損ねるまでになりました。

1990年8月にソ連を訪れた「市民によるチェルノブイリ事故調査団」のメンバーは、キエフでコスティン氏に会い、彼の体験談を聞き、作品を見せられました。「調査団」のメンバーは、この写真を借り受け、できるだけ多くの人にこの悲劇を伝えるために、日本で公開したいと申し入れました。コスティン氏は私たちの要望を快く聞き入れてくれました。私たちは、未公開写真を含む彼の代表的な作品五十点を一年間の約束で借りて、全国で写真展を開催することにいたします。この写真展で得た収益のすべては、コスティン氏の診断と治療のために使われることになっております。

私たちは、二度とこの悲劇を繰り返さないために、コスティン氏の写真を通して、できるだけ多くの人々にチェルノブイリ原発事故の悲劇の実態を伝えたいと願っています。そのために、まず全国各地に「イーゴリ・コスティン写真展〇〇実行委員会」を設立し、それぞれの地域の皆さんが自ら主催して写真展を開催していただきたいと思ひます。

コスティン写真展実行委員会

豊崎 博光・井上 啓・川口 亜子・坂本 国明・椎名 公三・鈴木千津子
中村 敏子・辻 一憲・藤堂 大輔・藤田 祐幸・藤谷 政子・山根 雅子

協力・・・たんぼぼ舎・原水禁・放射能汚染食品測定室・R-DAN運営委員会・生活クラブ生協連合・首都圏コープ連合・プレスオールターナティブ・原子力資料情報室・東京生活者ネットワーク

九州での写真展の開催を考えています。各地ご検討ください。また、デイズ・ジャパンや「0.3」でお馴染みの広河隆一さんが、永年にわたり撮り続けた核の犠牲者たちの悲しみが、いま一冊の写真集として出版されました。チェルノブイリ、スリーマイル、ネバダの現実がここにあります。一見の価値ある貴重な一冊です。事務局で多数預かっていますので、是非お求めください。

イーゴリ・コステイン写真展の

実施方法

○それぞれの地域に、それぞれの地域に相応しい「実行委員会」を結成して下さい。できるだけ多くの方々に見ていただくために、脱原発の様々な団体やグループ、消費者団体、労働組合、教育委員会などなど、それぞれの地域で可能なかぎりの協力をえるように努力して下さい。できるだけ都道府県単位で実行委員会を作り、写真を効率的に巡回するように工夫して下さい。

○写真展の主催者は各地の実行委員会になりますので、入場料なども地域の実情に合わせて決めて下さい。

○写真パネルは横幅60センチ程度です。写真は50点あります。その他に、油絵一点、コステイン氏の紹介のパネルなどがあります。これらを参考に会場を選んで下さい。

○開催の予定が決まったら、早めに事務局に申し出て下さい。日程が重複している場合は調整していただく場合があります。

○開催日に合わせて事務局から写真とコステイン氏の息子さんの絵、写真のキャプション、などの展示物一式を送ります。

○それぞれの作品はオリジナルプリントですので一点しかありません。一年

間の契約でコステイン氏から借りたものですので、取扱いに十分注意して下さい。取扱いのマニュアルは同時に送りますので、その指示に従って下さい。

○著作権の問題もありますので、写真の複写や撮影は禁止します。報道関係者による個別の写真の撮影も禁止します。（会場風景としての撮影は問題ありません）

○写真の貸出し料は、開催日一日あたり三万円です。この日数には移動日は含まれてません。輸送費用は主催者負担です。

○写真展終了後は、写真の数や傷の有無などを点検し、直ちに事務局まで返送して下さい。貸出し料は郵便振替口座に払い込んで下さい。

○記録をまとめる必要上、各地の写真展のチラシ、ポスターおよび写真展を報道した新聞記事など一部ずつ事務局に送って下さい。

○不明の点などありましたら事務局まで問い合わせして下さい。

コステイン写真展実行委員会事務局

東京都千代田区西神田2-7-14、西神田ビル4階、たんぼぼ舎気付
TEL.03-238-9035・FAX.03-238-0797
(1月1日以降局番の頭に3をつける)

郵便振替・東京4-410634

宮崎の青木さんが、ヴィースニツクにFAXを入れた、その返事です。ジトミールの汚染状況が報告されているので、そのまま掲載します。

1990 11.26

青木行雄様へ

拝啓

お手紙有り難うございます。手紙が遅れてもうしわけないと思っています。チラシの日本語をロシア語に訳すのにすこし苦勞したからです。皆様の援助をお受けする準備ができました。皆様の援助は、どんなものでも喜んでお受けさせていただきます。実際にどう使ったかは、皆様にお知らせいたします。もし、お越しいただけるようでしたら、一番のお客様としてお迎えできると思います。では、惨状の規模について（お話しいたします。）

ジトミール州の六つの地区は、放射能でひどく汚染されています。Narodiciは全体が、OvruchとLuginy, Korosten地区では大部分が、OlevskとMalin地区では部分的に汚染されています。その地域には455の居住地域があり、9万3千人以上の人々が住んでいます。そこには108の集団農場と国営農場があります。放射能のレベルは一つの集落や居住地域内でさえまちまちで、まだら状に高いところもあります。農業区域で汚染されている地域は34万4千ヘクタール、林業地域では、16万2

千ヘクタールです。ガンマー線のレベルは0.012から1.25ミリレントゲン/時です。セシウム137による汚染はある地域では200キュリー/㎥あり、ストロンチウム90とプルトニウム239によって汚染されている地域もあります。セシウム137による土壌汚染が1キュリー/㎥の地域では、汚染された牛乳が見られ、5キュリー/㎥以上の地域では牛乳がひどく汚染されていて、全て、そのレベルは基準を越えています。わが社の編集スタッフが、セシウム137による汚染のレベルが1キュリー/㎥から2キュリー/㎥の地域についてのデータを入手できないのは残念です。その地域の市民の半分はそれぞれ15ルーブルから30ルーブルの特別手当を受け取っています。人々はそれを、「棺桶代」と呼んでいます。政府は、食べ物に汚染されていない（いわゆる「クリーン・フード」）と言っていますが、必ずしもそれが信じられているわけではありません。政府は汚染地域にたいして様々なことをやり、何百万ルーブルもお金を費やしてきましたが、むだでした。それらの手立てでは、大事な問題が解決されず、人々は将来にたいして自信が持てていません。さらにそれらの地域では、道徳的な心理的な状況がますます複雑になってきています。いろいろな説があるだけでなく、こどもや大人の間でますます増加する病人（とくにガン）や、動物の「奇形」や、除染、まくいってないことによって状況が複雑になっていますが、なによりも大切なのは、政府の言ういわゆる「クリーン・フード」を受ける際の科学的なアドバイスに従えないと

いうことです。

避難の問題にたいしては、専門家のグループがそれぞれ違った回答をだしています。回答として12という数字をあげている専門家もいます。それ以外の人たちは、約166の集落で避難が必要であると言っています。この数字は（最終的なものではありませんが）、援助がなければ自分たち自身の力では避難ができないということを示しています。

この前の計算によると、12の集落の住民を避難させるためには、最低限9000万ルーブル以上が必要です。ジトミール州には、そのような額のお金はありません。

医療援助についても、十分ではないと言わざるをえません。たった7 Computer topographersと、超音波診断装置が一台だけしかありません。放射能による死者についての特別な統計学的データはありません。ガンによる病人の数が、全国のどこより、また世界のどこよりも、現在急速に増加しているということだけは分かっています。また、恐ろしいほどの動物の「奇形」が見られます。

私たち編集部一同は、チェルノブイリ原発は永遠に停止し、今まで述べてきた六つのひどく汚染された地域の住民をただちに避難させるべきだと考えます。しかし、ジトミール州の北部がまるごと汚染されています。人口はほぼ百万です。この情報で足りない場合、ご質問にたいしてもっと詳しいお答えをさせていただきたいと思ひます。

■福岡のみなさん。

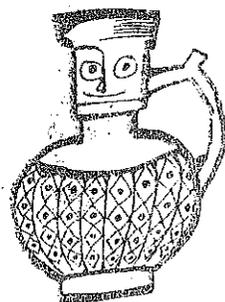
医療機器を当たってみてください。

宮崎の医療機器メーカーにあたってみました。

宮崎でも、こんなことをしている人たちがいるのかと歓迎的でした。「中部」からもらっていた、医療器具のリストを見せたところ、私のところで扱っている品だとチェックし、社員にも気をつけておくよう指示するとのことでした。が、宮崎は福岡などに比べ小さな市。おまけに、宮崎にある医療メーカーは支店、支社ばかり。

そこで福岡市なりの大都市？に住んでいる方へお願い。医療メーカーに直接当たってみて下さい。自分達のやっていることを自信をもって話せば、ある程度協力してくれると思います。だめでもともと！当たってみることからしか始まりません。（青木）

ということです。次は医療団派遣です。そのためにも、医薬品メーカーや医療器具メーカーへの協力要請はぜひ実行し、現実的な協力を仰ぐ必要があります。よろしくお祈りします。



Contamination of northern part of Zhitomir region

